



## 寒中お見舞い申し上げます。

今年(西暦2000年)は全世界で盛大なカウントダウンセレモニーが行われました。皆様はどのような2000年の朝を迎えたのでしょうか。私といえば、ごちそうと酒のために世紀的瞬間には、既に深い眠りについておりました。

私の田舎では、昨年3月に父が他界したため大みそかは「おさみし参り」で親族の人たちが来てくれ、父のことを思い出しながらの年越しになりました。しかし、それを除けば、そう変わりばえのしない、おだやかな新年でした。

2000年といっても、昔の西欧人はゼロという数字を知らなかったため、今年「数え」で2000年だそう。それでも大さわざするのは、ゼロ三つという数字のマジックでありましょう。数字といえば、最近気になってしょうがないのが日本の借金の数字です。600兆円、赤ん坊も入れた国民1人あたりの借金の額が500万円だということです。この数字は、はっきり言って国家破産を裏付けるものなのでしょう。ところが、最近では円高基調、株価も上昇気味だとか。どうにも理解できません。

日本の個人の金融資産の残高は1300兆円という人がいます。だからまだ日本は大丈夫だということでしょうか。ナニワ金融道という金融マンガを書いた青木氏は、そんな金がどこにあるのか、目の前に積み上げて見せてくれ、と言っております。私たちは数字のマジックに踊らされ、借金づけで将来確たる展望のないまま生きていかなければならないのでしょうか。

中国の故事に、「国に政策あれば、民に対策あり。」という言葉があります。この言葉に習って、国の政策を見すえながら、したたかに生きていくことが必要な時代になってきたということでしょうか。

さて、弁護士の世界にも変革の嵐が吹きおこそうとしています。弁護士数の飛躍的増大、広告の自由化、法人化、法律業務独占の見直しなど。最近同業者である弁護士からのあいさつ状を読んでも、「自由と正義」や「基本的人権の擁護」といった言葉は昔のものとなり、最近で

は「迅速、丁寧なリーガルサービス」「ニーズに適確に対応」等の言葉が流行語のようにあふれてきています。時代に応じて弁護士も変わらざるを得ないということでしょう。

さて、当事務所も4月から新しく弁護士が加わり、弁護士2人体制となる予定です。新体制のもとでは時代の変革に対応したリーガルサービスの提供を目指したいと思っております。その一方で、人間の幸福とは個人の尊厳を根源とする自由と愛にあるという基本的な観点を忘れないよう、日々精進して参る所存です。

本年も、よろしくお願い申し上げます。



### 【電子商取引の落とし穴】

世の中インターネットばかりで、インターネットで何かやっていないと取り残されたような気になる昨今である。

インターネットによる商取引も盛んになりつつあるが、取引のセキュリティを高めるために、暗号化の技術などが発展してきている。しかし、いくら技術が発達しようと、それを悪用しようとする者は必ずいる。技術が進歩すれば取引の安全性に全く問題がないという楽観論が多いが、私はどうしても懐疑的にならざるを得ない。技術の発展に合わせて消費者保護の法制度が整備されるべきにもかかわらず、それがおざなりになっているからである。

象徴的な一例として、クレジットカードをあげてみよう。クレジットカードには署名欄があるが、日本においては商品の販売店にカードの

署名と購入者であるカードの所持人の署名との同一性を確認すべき法的義務がない。日本で買い物をして署名をチェックされることがほとんどないのも、この法制度が原因している。

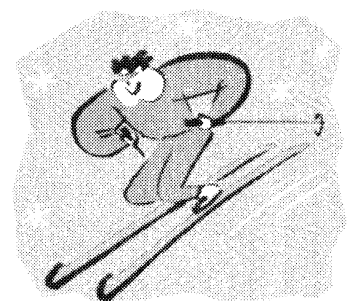
私が1年間住んでいたイギリスでは、クレジットカードの署名と自分の署名を一々見比べられた。あるガソリンスタンドの親父はしげしげと漢字で書いてある私の署名を見比べ、笑いながら、自分にはとうてい書けない、と言っていた。

署名文化の有無ということもあるのだろうが唯一の取引の安全性のよりどころである署名の同一性をチェックしなくてよいと認めている日本の立法者の感覚が信じられない。クレジットカード会社や、販売店に言わせれば、署名の同一性などいちいちチェックしてられないし、分かりっこないというのであろう。

最低限の取引の安全性をないがしろにして、クレジットカード会社や販売店の都合ばかり優先する、その基本的姿勢に疑問を持つのは私だけだろうか。

今の日本では、クレジットカードが盗まれて悪用されても使用を差し止めることはできない(特にコンピュータ処理していない販売店で悪用された場合)。結局消費者が泣くことになるのである。

最近消費者契約法の制定が懸案になってきているが、クレジットカードの署名の確認も義務づけられないようでは、意味がない。消費者保護の観点の抜けた電子商取引では不安がいっぱいだ。



## 親父の背中

父が「吉太郎行くか。」と呼びに来る。小学生の私は、うんとうなづいてダットサンダットサンの小型トラックの助手席に乗り込む。田舎の瓦工場を営む父が、瓦葺の見積りを頼まれ、出掛けるのだ。お得意さんは、大概が農家で、工場のある市内より山深く入った、本当にタヌキやキツネが出てくるようなところに、家があった。道中は狭いでこぼ道で、帰りが遅くなって暗くなると、本当に心細い道であった。農家に着いて、お茶やつけものをごちそうになりながら、見積りをする父をながめていた。訪ねる家々で、出してくれる茶菓子の違いが、私のひそかな関心事であった。父のことを思い出そうとすると、必ずトラックの助手席からの父の横顔、お客さん等と談笑する父の笑顔が浮かんでくる。

仕事の虫であったが、魚採り、ヤマイモ掘りや遊びも大好きで、私も良くついて行った。好奇心が旺盛で、何にでも興味を示した父であった。旅行も大好きで、田舎人にしては、海外旅行の経験も多かった。

弁護士1年目の冬に、父と母を連れてロンドン・パリを旅行したのが、父との旅行の最後になってしまった。ロンドンのレストランでピザを食べたところ、糸を引くチーズを見て、「これは納豆か」と言って笑わせたり、セヌ川の遊覧船から水鳥にエサをやりはじめたり、ユーモラスな父でもあった。

思い返せば、私は父に反発した記憶がない。父は、私に自分のありのままを見せてくれていたからであろう。

今、私は2児の父となり、私の父が私にしてくれたことと同じようなことが子供たちにあげられるだろうかと考えている。



## 魅惑のイタリアン

最近イタリア料理に凝っている。といってもトマトソースペースのスパゲッティなのだ。しかし、レストランへ行って食べるのではない。自分でトマトソースから作ってしまうのだ。

何故イタリアンなのか、自分でもよくわからない。ある日、テレビで本場のインド料理の番組を見ていたら、自分で無性に料理が作りたくなった。そして、日頃台所に立ったことのない私に作れるのは、せいぜいスパゲッティぐらいだろうという妻の助言から私の料理は始まったのである。

しかし、そこはたまにしかやらない男の料理、材料にかなりこだわった。どうせ作るなら、海鮮スパゲッティにしようと思ひ立ち、

有頭エビと新鮮なイカを入手した。ベースとなるトマトソースは、もちろん、ホールトマトの缶詰と赤くうれたトマトを使用する。まず、下ごしらえとして、玉ねぎのみじん切りをオリーブオイルと塩・コショウとニンニクでいため、アメ色になったところにトマトを入れ、チキンコンソメとワインで味付けし煮込む。一方で、エビとイカを塩、コショウ、ニンニクでいため、ワインを入れる。なお、エビは有頭でなければならない。なぜなら、エビの脳ミソがいちばんおいしいからである。エビ、イカをいため終わったところで、トマトソースを中に入れる。臭み消しの月桂樹の葉を2〜3枚入れて弱火で15分ほど煮込む。そして保温鍋へ移して1〜2時間待たせたらでき上がり。

今まで、家に来たお客さんに時々出しているのが大好評。後で夢にまで見たという程のおいしさだったという。(?)

☆ なお、この料理、あなたにも作れます。ただし、使用ワインは秘伝です。これが決め手にもなるのですが、どうしても知りたい方はお問い合わせ下さい。



## 姉の結婚

私は三姉妹の末っ子で、一番上の姉に言わせると「甘やかされて育った」らしい。

私たちの性格は全くと言ってよいほど共通点がない。特に2番目の姉は、高校時代アメリカ留学を経験したということもあり、かなり「飛んで」いる。

その姉が、昨年1月に2度目の結婚をした。それも子連れ婚である。私も上の姉も母も、結婚することについては、反対しなかった。彼女の経済的・精神的負担が軽くなるだろうし、なにより子供には「父親」が必要だと思ったからである。

私は、父親を17の時に亡くし、それなりに想い出は残っているものの、これまで「今父親がいてくれたらな」と思う場面がしばしばあった。子供達も、父親のいないさびしい思いをしていることがわかっていたので、いわゆる「普通の家庭」で育てて欲しいと思っていた。

その反面、不安がなかったわけではない。今、社会問題として新聞の紙面ににぎわされている「幼児虐待」。義理の父親からの虐待など。それらの記事を見るたびに、少し人ごとではないような気がしてならなかった。

初めて姉の結婚相手に会ったとき、少しその不安が減った。子供たちも非常になつていて、いつもなら「たまに帰ってくるお姉ち

ゃん」である私にくっついてくるのに、そのときばかりはお株を奪われた気さえた。

2度目に会ったのは結婚式当日。結婚式、披露宴が滞りなく進み、披露宴の終盤、新郎の挨拶になった。壇上で彼は「小坂家のお母さん、お姉さん、妹さん。僕はそれほど稼ぎがいいわけではありませんし、どーんと任せておいて下さい、とはまだ言い切れません。でも子供たちのことは絶対に幸せにします。だから安心して下さい。」と号泣しながら、でもはっきりと言ってくれた。思わず私も姉も、そして母親も号泣……。この人だったら大丈夫だろうな、と安心した。

ただ一つ、2度も結婚できる姉がいるのにどうして、私にはそれっぽい話がないのだろうか。私が壇上で母をこの時と同じ涙で号泣させてあげられる日は、いつになるのだろうか……。一抹の不安だけが残った一日であった。(小坂 由美)



## 自分の時間

就職して約8カ月、最初はライフサイクルに慣れることで必死になっているところがありました。

自由な時間が当たり前のような学生の頃とは違い、社会に出て初めてその「大切さ」に気がついたように思います。そんな突然の思い立ちから、1時間半の通勤時間に読書をするようになりました。最近では週末の仕事帰りに日比谷公園の中にある図書館へ寄ることが楽しみの一つとなっています。私は大学の4年間、書店でアルバイトをしていました。そのせいか、本の匂いを嗅ぐと何かとても安心してしまおうと同時に、新たに出会う本への期待で胸がいっぱいになれるひとときでもあります。

この先も多くの本を通じて、自分の未知なる世界への見聞をできる限り広げていく機会を持っていきたい、と考える今日この頃です。(鈴木 陽子)

